

病虫害発生予察予報第2号（6月の予報）

佐賀県

目次

1. 6月の病虫害	1
2. 気象概要	2
3. 予報の内容・根拠等について	2
4. 6月の予報	
<u>普通作物</u> （水稻）	3
<u>果樹</u> （カンキツ、ナシ、ブドウ、果樹全般）	7
<u>茶</u>	15
<u>野菜</u> （イチゴ、アスパラガス）	18
5. <u>病虫害診断状況</u>	23
6. <u>全国・佐賀県で多発生している病虫害及び新たに発生した病虫害</u>	24
7. <u>農薬の適正使用について</u>	25

今月のトピックス

6～8月は、農薬危害防止運動の実施期間となっています。農薬の安全かつ適正な使用や保管管理を徹底しましょう。

1. 6月の病虫害（予報で対象とした病虫害の中から抜粋）



水稻の葉いもち（矢印が病斑）



カンキツ黒点病



イチゴのうどんこ病



チャのカンザワハダニ

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病虫害防除部
〒840-2205 佐賀市川副町南里1088
TEL (0952)45-8153 FAX (0952)45-5085

2. 気象概要

【3ヶ月予報 平成27年5月25日 福岡管区気象台発表】

6月は、平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。

6月の要素別確率(%)

要素	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	20	40	40
降水量	40	40	20

各病害虫の「予報の根拠」として、上記の向こう1か月の気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

上記の気象予報(確率予報)の内容について、本文中では便宜上、「気温やや高」、「降水量やや少」と簡略的に表現しています。

【参考】

要素	平年値 (佐賀市)	平年差(比)の平年並の範囲 (九州北部地方)
6月の平均気温	23.3℃	-0.3℃ ~ +0.4℃
6月の降水量	339.0mm	82% ~ 121%

3. 予報の内容・根拠等について

病害虫の発生量(平年比)

○予報の発生量は平年(佐賀県の過去10年間)及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

○留意点として、平年値との比較であるため、平年値が低い病害虫は、「平年より多い」場合でも見かけの発生は多くないことがあります。一方、発生が毎年目立ち、平年値が高い病害虫は、「平年並」や「平年よりやや少ない」場合でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

予報の根拠

○予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

○それぞれの条件は、少発生(－)、やや少発生(－～±)、並発生(±)、やや多発生(±～＋)、多発生(＋)として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。

写真

○1ページ目には、予報で対象とした病害虫の写真を抜粋して掲載しています。

○3ページ目以降には、巡回調査時の各作物の生育状況の写真を掲載しています。

4. 6月の予報

普通作物

【概要】

作物名	病虫害名	発生量		病虫害防除のてびきの記載ページ	備考
		平年比	前年比		
早期水稲 (上場地域)	葉いもち	並	並	133～142 145～151	
	イネミスヅウムシ	やや多	やや少	178～179 193～194	
山間早植え水稲	葉いもち	並	並	133～142 145～151	
	イネミスヅウムシ	並	並	178～179 193～194	
普通期水稲	葉いもち	やや多	やや多	133～142 145～151	平成27年4月28日付け病虫害対策資料第2号 参照
	スクミリンゴガイ	並	並	184～189	
水稲全般	縞葉枯病(ヒメビウカ)	並	並	170～171	

【特記事項】

- 育苗期に苗いもちが確認された場合は、早急に取り除くとともに防除を行う。例年、本田でいもち病の発生が多い地域では、育苗箱施薬剤を必ず施用する。
- トビイロウンカ等は、育苗箱施薬剤の処理量が少ないと防除効果が低下するので、適正な量を処理する。

水稲（早期、上場地域）

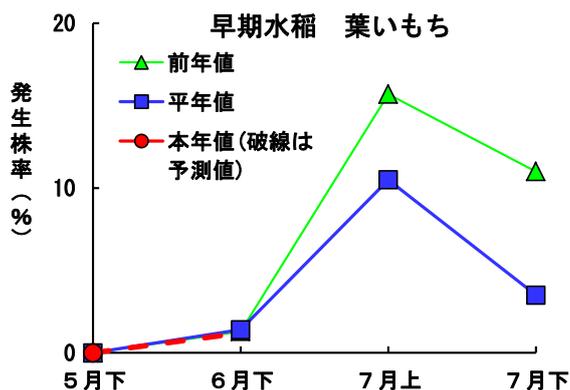
(巡回調査日：5月22日)



巡回調査時の生育状況

1. 葉いもち

- 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 予報の根拠
 - 巡回調査では、発生を認めていない（発生株率：平年0%、前年0%）。〈±〉
 - 気象予報では、やや少発生の条件となっている。〈-～±〉(降水量やや少：-～±)
- 防除上注意すべき事項
 - 補植用苗や畦畔に放置された残り苗は、葉いもちの伝染源になるので活着後に速やかに処分する。
 - 葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。



2. イネミズゾウムシ

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや少ない）
- 2) 予報の根拠
(1)巡回調査では、食害株率は28.3%（平年35.6%、前年62.3%）であり、平年並で前年より少ない。〈±〉
(2)気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±～+〉（気温やや高：±～+）
- 3) 防除上注意すべき事項
(1)本田で成虫が10株当たり5頭以上みられたら粒剤を散布する。

水稻（山間早植え）

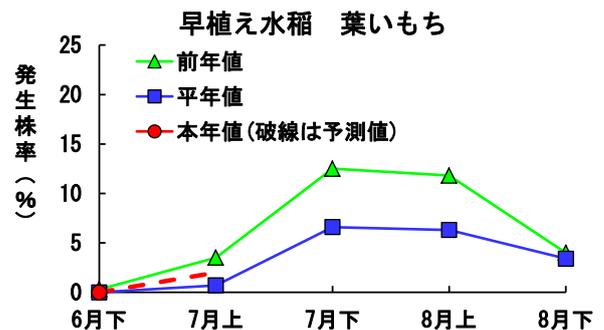
（巡回調査日：5月21日）



巡回調査時の生育状況

1. 葉いもち

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
(1)巡回調査では、発生を認めていない（発生株率：平年0%、前年0%）。〈±〉
(2)気象予報では、やや少発生の条件となっている。〈-～±〉（降水量やや少：-～±）
- 3) 防除上注意すべき事項
(1)補植苗や畦畔に放置された残り苗は、葉いもちの伝染源になるので速やかに処分する。
(2)葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。



2. イネミズゾウムシ

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
(1)巡回調査では、食害を認めていない（食害株率；平年2.1%、前年1.3%）。〈-～±〉
(2)気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±～+〉（気温やや高：±～+）
- 3) 防除上注意すべき事項
(1)本田で成虫が10株当たり5頭以上みられたら粒剤を散布する。

水稻（普通期水稻）

1. 葉いもち

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
(1)前年の穂いもちの発生状況
平成26年の穂いもちの発生株率は、普通期水稻（10月上旬）で38.8%（平年5.9%）であり、平年より多かった。〈+〉

(2) 水稻粃のいもち病菌保菌率

昨年の巡回調査時に県内各地の現地圃場から採取した粃のいもち病菌保菌率は、普通期水稻のうち品種で3.6%（平年0.4%）、普通期水稻のもち品種で0%（平年0.3%）であり、普通期のもち品種では平年並であるが、うるち品種においては平年より高かった（ここ十年で一番高い）。〈±～+〉

(3) 気象予報ではやや少発生の条件となっている。〈-～±〉（降水量やや少：-～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 育苗箱で苗いもちの発生をみられたら、早急に取り除き、防除を行う。

(2) 発生の多い地域では、育苗箱施薬剤を施用する。

(3) 補植苗や畦畔に放置された残り苗は、葉いもちの伝染源になるので速やかに処分する。

(4) 葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。

2. スクミリンゴガイ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 越冬状況

①平成27年4月に調査した用排水路における平均越冬生貝率は、35.1%と平年(49.6%)よりやや低かった。〈-～±〉

②水田内での越冬生貝率は、平成26年12月～平成27年2月の平均気温が6.55℃と平年(6.57℃)並であったことから、平年並と推定される。（過去の冬期の気温と翌春の貝の越冬生貝率との解析の結果、両者の間に明確な正の相関が認められている。）〈±〉（詳細は[平成27年4月28日付け予報第1号](#)参照）

(2) 気象条件

気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±～+〉（気温やや高：±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 用排水路・クリークにおいて密度の高い地域では、貝及び卵塊を捕殺する。

(2) 発生圃場では、浅水管理を徹底する。

(3) 発生が多い圃場では、薬剤防除を行う。

水稻（全般）

1. 縞葉枯病(ヒメトビウンカ)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 早期水稻では本病の発生を確認していない。〈±〉

(2) すくい取りでの小麦におけるヒメトビウンカ第1世代幼虫数は26.0頭（平年16.5頭、前28.4頭）と平年よりやや多く前年並である（第1、2表）。〈±～+〉

(3) 平成27年度のヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、県下全体で0.3%（平年1.9%、前年1.0%）と平年よりやや低く前年並である（第1、3表）。〈-～±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本病はヒメトビウンカが媒介するため、ウンカ類を対象とした育苗箱施用剤を使用する。

(2) 発病株が認められた圃場では、発病株を抜き取るとともに、薬剤によるヒメトビウンカの防除を行う。

第1表 各調査地点におけるヒメトビウンカの発生とイネ縞葉枯病ウイルス保毒状況（平成27年）

調査地点	小麦圃場でのヒメトビウンカの発生	ウイルス保毒状況	
	20回すくいとり虫数 (2圃場平均 ; 5月20~22日)	検定虫数	保毒虫数
	頭	頭	頭
佐賀市1	8.0	26	0
佐賀市2	18.0	35	0
鳥栖市	12.0	40	0
神埼市	39.0	40	0
小城市1	8.0	30	1
小城市2	40.5	40	0
多久市	14.5	29	0
武雄市	23.0	30	0
鹿島市	14.0	40	0
吉野ヶ里町	42.5	40	0
白石町	66.0	40	0
平均	26.0	県内保毒虫率 $1/390 \times 100 = 0.3\%$	

第2表 小麦（黄熟期～成熟期）でのヒメトビウンカの発生状況（20回すくい取り幼虫数）

	平成17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年	27年	平成
虫数	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭
(県平均)	5.7	41.7	21.2	8.7	22.9	13.0	11.7	2.7	9.0	28.4	26.0	16.5

注) 5月中～下旬に、県内11～14地点の各2圃場ずつ調査を実施(平成27年の詳細は第1表参照)。

第3表 近年のヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の推移

	平成17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年	27年	平成
保毒虫率	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
(県平均)	3.1	3.3	2.1	0.9	1.6	1.3	4.2	0.9	1.0	0.0	0.3	1.8

注) 5～6月にヒメトビウンカを小麦圃場から採集して検定を実施(平成27年の詳細は第1表参照)。

果 樹

【概要】

作物名	病虫害名	発 生 量		病虫害防除 のてびきの 記載ページ	備 考
		平年比	前年比		
カンキツ	そうか病	並	並	230～232	
	かいよう病	やや少	並	234～237	
	黒点病	並	並	232～234	
	灰色かび病	やや多	やや多	237～238	
	ミカンハダニ	並	やや多	259～263	
	チャノキアザミウマ	並	並	252～259	
ナシ	黒星病	やや多	やや少	298～303	平成27年4月30日付 け病虫害対策資料第 4号参照
	ナシメシクイ	やや少	並	314～317	
ブドウ	黒とう病	並	並	340～342	
	べと病	並	並	344～346	
	褐斑病	並	並	347～348	
	チャノキアザミウマ	並	並	354～355	
果樹全般	カメムシ類	やや多	やや多	カンキツ：266～269 ナシ：318～319 ブドウ：360～361	平成27年5月22日付 け病虫害対策資料第 5号参照

【特記事項】

【カンキツ】

- カンキツ黒点病は、梅雨期に伝染しやすいため防除を徹底する。マンゼブ水和剤散布後の次回散布時期は、積算降雨量が200mm～250mm（マシン油乳剤加用の場合は300～400mm）に達した時点を目安とする。ただし、同雨量に達しない場合でも、散布後1ヶ月を目途に次の散布を行う。
- ミカンサビダニは6月上中旬が重要な防除時期であるため、防除を徹底する。

【ナシ】

- 黒星病の発病葉や発病果実は伝染源となるため除去し、園外で処分する。また、6月下旬～7月上旬は主要な伝染期であるため、DMI剤による防除を必ず実施する（[平成27年4月30日付け病虫害対策資料第4号参照](#)）。

【ブドウ】

- 大豆大の時期から袋かけ前までは薬剤による果面の汚れや果粉の溶脱が発生しやすいため、小豆大の時期までの薬剤防除を徹底する。（次頁へ続く）

【果樹全般】

1. スピードプレイヤーで薬剤散布する場合は、全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなどして、丁寧に散布する。また、ナシ・ブドウにおいて手散布する場合は、薬液が十分かかるように棚の上下両方向から行う。
2. カメムシ類の飛来が県内一部のナシ、ウメなどの果樹園で確認されている。飛来状況は地域や園地により異なるため、園内外をこまめに見回り早期発見・早期防除に努める（平成27年5月22日付け病害虫対策資料第5号参照）。

カンキツ

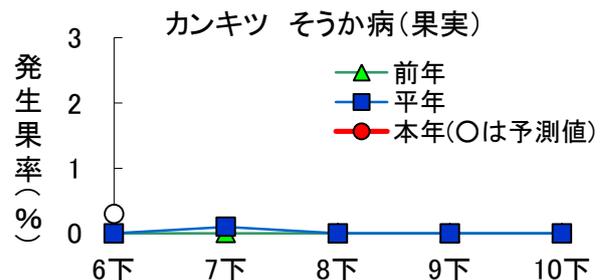
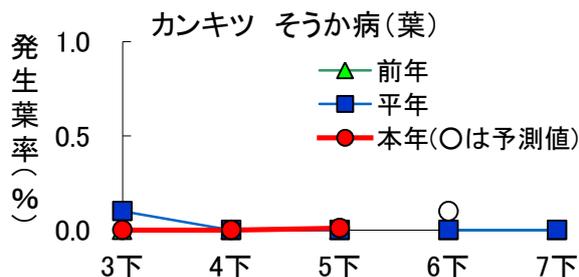
（巡回調査日：5月21～25日）



巡回調査時の生育状況

1. そうか病

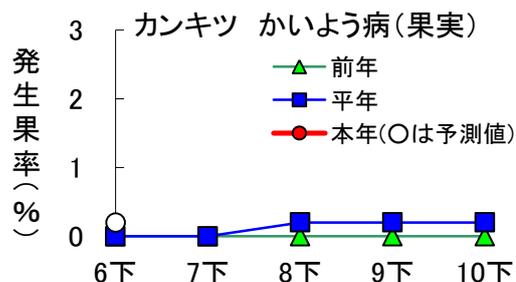
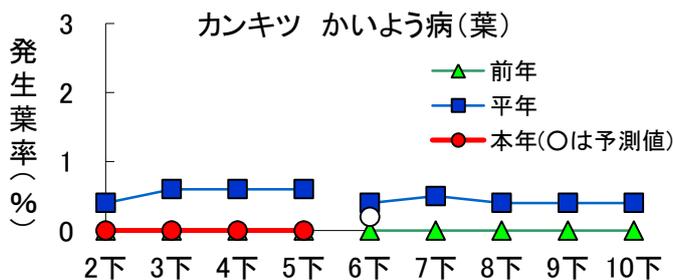
- 1) 予報の内容
発生量：**平年並**（前年並）
- 2) 予報の根拠
(1)巡回調査では、温州みかん葉での発生を認めていない。（発生葉率：平年0%、前年0%）〈±〉
(2)気象予報では、やや少発生の条件となっている。〈-～±〉（降水量やや少：-～±）
- 3) 防除上注意すべき事項
(1)デランフロアブルとマシン油乳剤を混用又は近接散布すると、果実に薬害を生じる場合がある。ただし、その間に200mm以上の降雨があれば生じることは少ない。



注：5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査

2. かいよう病

- 1) 予報の内容
発生量：**平年よりやや少ない**（前年並）
- 2) 予報の根拠
(1)巡回調査では、温州みかん葉での発生を認めていない。（発生葉率：平年0.6%、前年0%）〈-～±〉
(2)気象予報では、やや少発生の条件となっている。〈-～±〉（降水量やや少：-～±）
- 3) 防除上注意すべき事項
(1)本病が問題となる園（ネーブル、いよかん、はるみ等の中晩柑、高糖系温州が植栽された園、幼木園、高接園、風当たりが強い園）では、無機銅剤による防除を行う。
(2)無機銅水和剤（クレフノン200倍加用）を用いて定期的（20～25日間隔）に防除を行う。
(3)発病した枝や葉は今後の伝染源となるので除去する。ただし、強剪定すると枝が遅くまで伸長し、本病にかかりやすい期間が長くなるので行わないこと。



注：5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査

3. 黒点病

1) 予報の内容

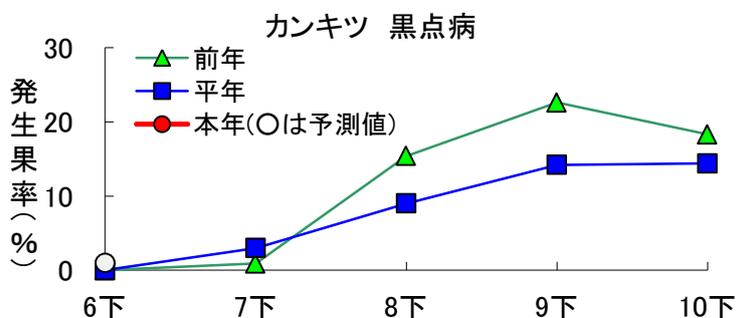
発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 気象予報では、やや少発生の条件となっている。〈-~±〉（降水量やや少：-~±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発病した枝や葉は今後の伝染源となるので除去する。
- (2) 梅雨期は果実への主要感染期にあたるので防除を徹底する。マンゼブ水和剤散布後の積算降雨量が200mm~250mmに達した時点を次回の散布の目安とする。
- (3) 黒点病の防除薬剤にマシン油乳剤を加用した場合は、薬剤散布後の積算降雨量300~400mmを次回の防除の目安とする。なお、同雨量に達しない場合でも、散布後1ヶ月を目途に次回の散布を行う。
- (4) 園内湿度を下げるために防風樹の剪定等を行い、通風をよくする。



4. 灰色かび病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生花弁率は13.1%（平年0.9%、前年0.8%）で、平年及び前年より多い。〈+〉
- (2) 気象予報では、やや少発生の条件となっている。〈-~±〉（降水量やや少：-~±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 傷果防止のために、一次落果期（6月第1半旬）に防除を行う。
- (2) 古い花弁は発生源となるため、樹や枝をゆすって人為的に落とす。

5. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、寄生葉率は0.5%（平年5.9%、前年7.8%）であり、平年及び前年よりやや少ない。〈-~±〉

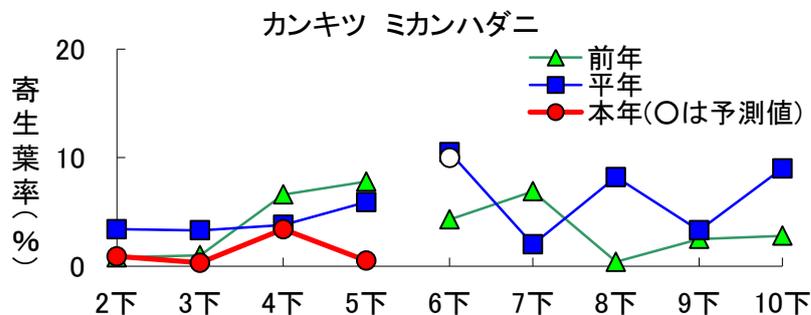
(2) 気象予報では、多発生の条件となっている。〈+〉（気温やや高：±~+、降水量やや少：±~+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ種類の薬剤は年1回の使用とする。また、前年使用した殺ダニ剤は使用しない。

(2) 低密度時（寄生葉率30%未満または1葉当たりの雌成虫の数が0.5~1頭）に防除を行う。

(3) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を遅延させるため、6月下旬までマシン油乳剤を利用し、殺ダニ剤の使用を極力控える。



注：5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査

ナシ

(巡回調査日：5月21日)



巡回調査時の生育状況

1. 黒星病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、発生葉率は2.0%（平年1.1%、前年2.3%）であり、平年より多く前年並である。〈+〉

(2) 巡回調査では、発生果率は2.7%（平年1.2%、前年4.8%）であり、平年よりやや多く前年よりやや少ない。〈±~+〉

(3) 気象予報では、やや少発生の条件となっている。〈-~±〉（降水量やや少：-~±）

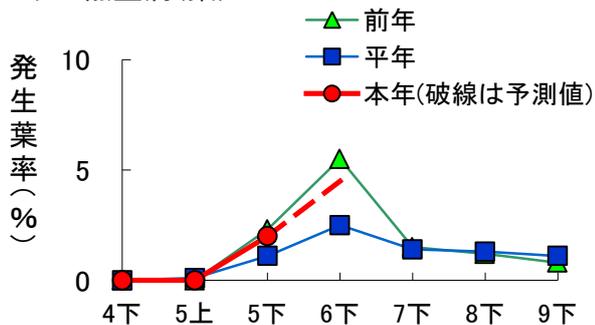
3) 防除上注意すべき事項

(1) DMI剤耐性菌の発生を防止するために、5~6月中旬までの薬剤防除は、原則的に保護殺菌剤を使用する（薬剤は[施肥・病害虫防除・雑草防除のてびき](#) P298~303を参照）。ただし、発病が認められた場合や長雨等で薬剤散布ができなかった場合はDMI剤を散布する。

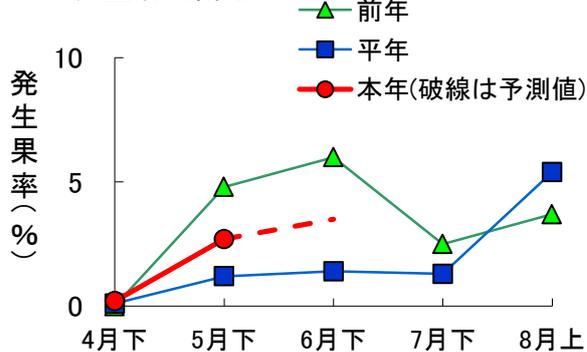
(2) 発病葉や発病果実は除去し、園外で処分する。また、6月下旬~7月上旬は主要な伝染期であるため、DMI剤を用いた防除を必ず実施する。

(3) スピードスプレーヤーで薬剤散布する場合は、全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなどして、丁寧に散布する。

ナシ黒星病(葉)



ナシ黒星病(果実)



2. ナシヒメシクイ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

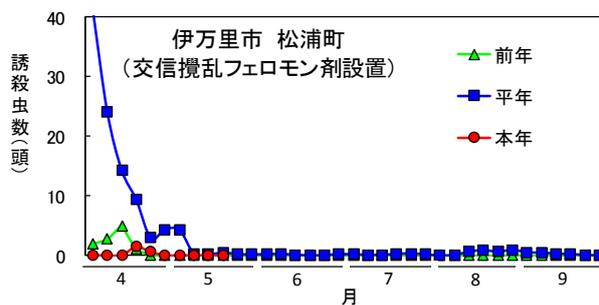
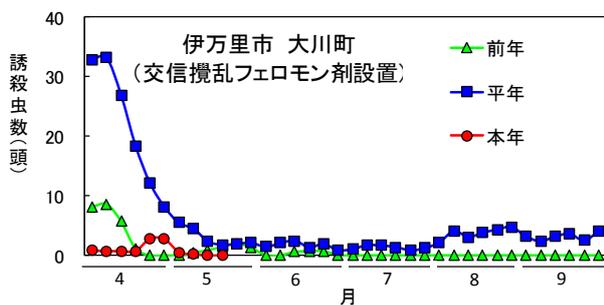
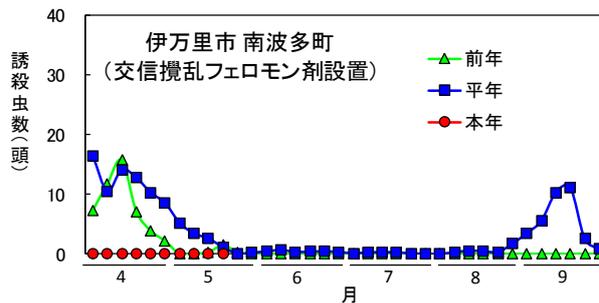
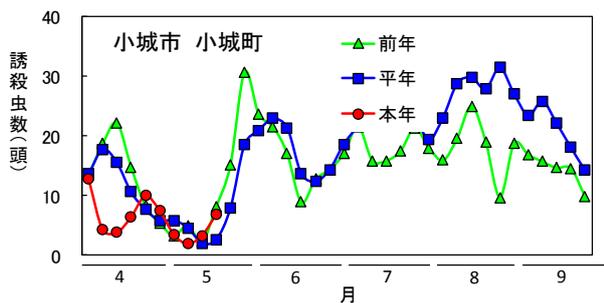
2) 予報の根拠

(1) フェロモントラップによる4月上旬～5月中旬の誘殺虫数の平均は18頭（平年99頭、前年47頭）で、平年及び前年より少ない。<->

(2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている。<±~+>（気温やや高：±~+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 交信攪乱フェロモン剤の設置を予定している園では、早急に設置する。



フェロモントラップによるナシヒメシクイの誘殺推移
 (小城市は果樹試験場、伊万里市は西松浦農業改良普及センター調査)

ブドウ

(巡回調査日：5月21日～22日)



巡回調査時の生育状況

1. 黒とう病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

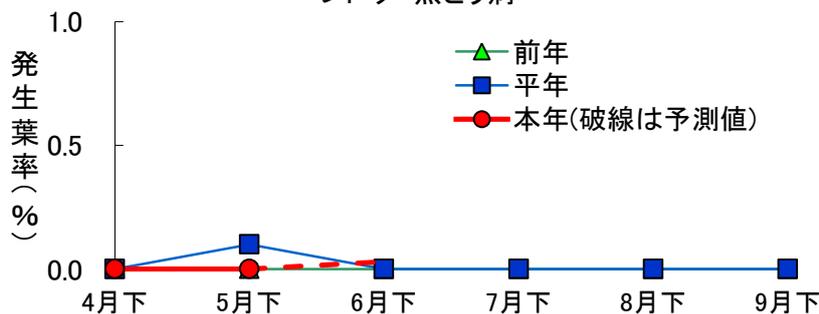
(1)巡回調査では、発生を認めていない。（発生葉率：平年0.1%、前年0%）〈-～±〉

(2)気象予報では、やや少発生の条件となっている。〈-～±〉（降水量やや少：-～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1)発病した枝の剪除と巻きひげの処分を徹底する。

ブドウ 黒とう病



2. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、発生葉率は0.2%（平年0%、前年0%）であり、平年及び前年よりやや多い。〈±～+〉

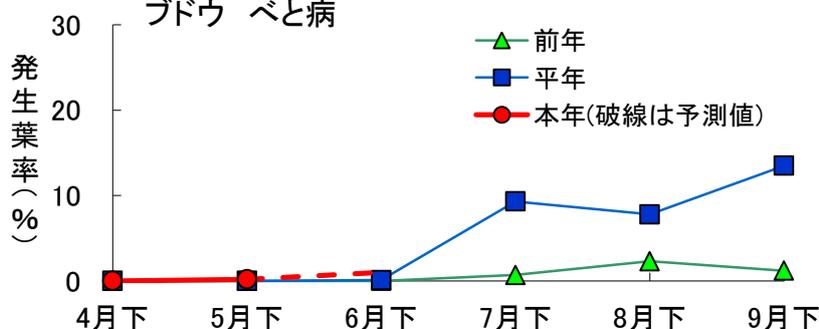
(2)気象予報では、やや少発生の条件となっている。〈-～±〉（降水量やや少：-～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1)降雨により感染が進展するため、降雨前の予防散布を行う。

(2)ブドウべと病では、ストロビルリン系殺菌剤（アミスターフロアブル、ストロビードライフフロアブル等）に対する耐性菌が発生しているため、本病の防除には使用しない。

ブドウ ベと病



3. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1)黄色粘着トラップによる5月第1～5半旬の誘殺数は、平年及び前年よりやや少なく推移している。〈-～±〉

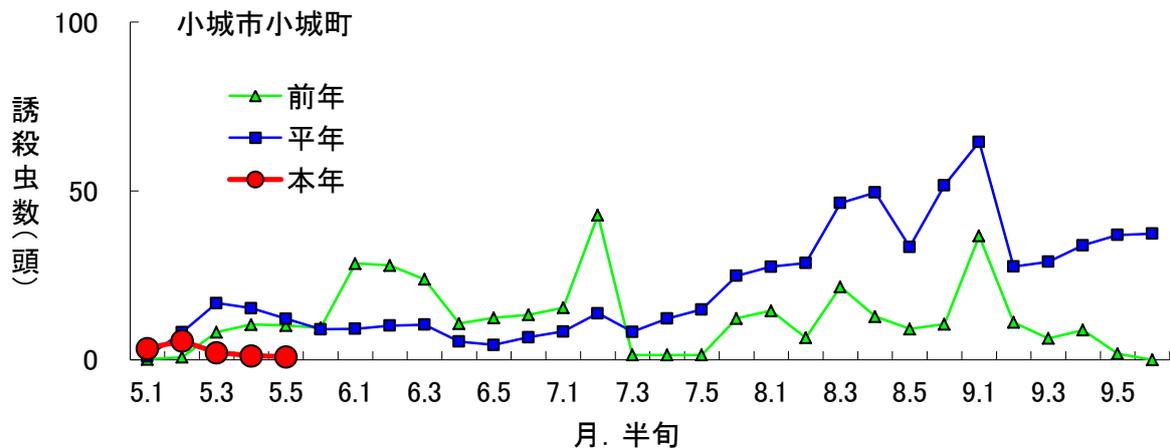
(2)気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±～+〉（降水量やや少：±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1)6月中旬～7月中旬は主要な加害時期であるので、袋かけ前後の薬剤防除を徹底する。

(2)袋かけ前（大豆大期）に薬剤防除を行う際は、果粒の汚れ及び果粉の溶脱が少ない薬剤を選定する。

(3)袋内への侵入を抑制するために、袋の締め口をしっかりと締める。



黄色粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの誘殺数の推移（果樹試験場調査）

果樹全般

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1)平成27年1月中～下旬に、県内22地点の常緑広葉樹林の林床から落葉を採集し、チャバネアオカメムシ成虫の越冬状況を調査した結果、平均越冬虫数は0.18頭/m²（平年0.34頭/m²、前年0.29頭/m²）、越冬地点率は31.8%（平年46.5%、前年36.4%）であり、越冬密度は平年及び前年並と推定される（[平成27年3月5日付け病害虫対策資料第23号](#)参照）。

〈±〉

(2)予察灯（3地点、図1）及びフェロモントラップ（5地点、図2）による平均誘殺数は平年並～やや多く、一部地区では誘殺数が多くなっている（表1）。〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)こまめに園内を見て回り、確認した場合は早急に防除を行う。

(2)果樹カメムシ類は樹高の高い樹木に一旦飛来して、その後果樹園に飛来する傾向があるので、防風樹等は必要以上に高くならないように剪除する。

(3)合成ピレスロイド剤等を散布するとハダニ類やカイガラムシ類の異常増殖（リサージェンス）を生じる場合があるので、これら害虫の防除対策も実施する。

(4)その他詳細については、[平成27年5月22日付け病害虫対策資料第5号](#)を参照する。

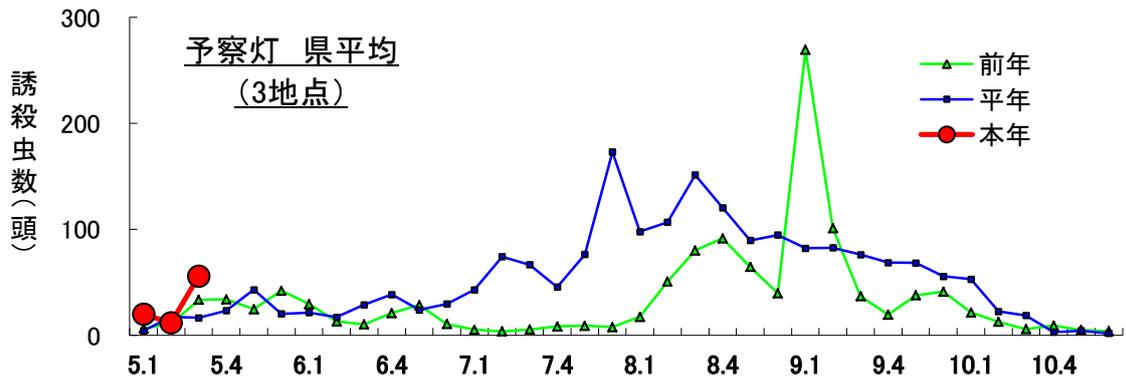


図1 予察灯（佐賀市、小城市、太良町）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

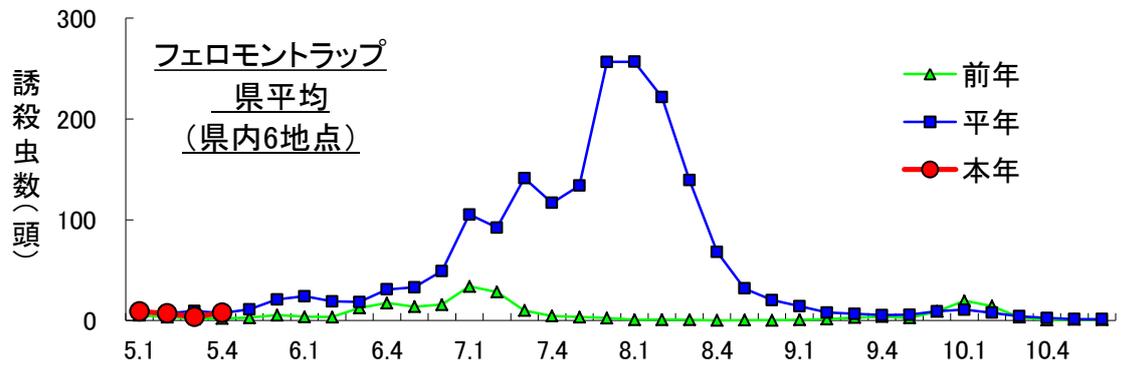


図2 フェロモントラップ（小城市、伊万里市、唐津市浜玉、唐津市鎮西、基山町）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

茶

【概要】

作物名	病害虫名	発 生 量		病害虫防除のてびきの記載ページ	備考
		平年比	前年比		
茶	カンザワハダニ	多	多	418～419	平成27年5月28日付け病害虫対策資料第6号 参照
	クワシロカイガラムシ	並	並	427～428	
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	並	423～424	
	チャノキイロアザミウマ	並	並	425～426	
	チャノコカクモンハマキ	並	並	421～423	
	チャノホソガ	並	やや多	420～421	

【特記事項】

- 二番茶は萌芽から摘採までの期間が短いので、病害虫の発生状況をよく観察し、適期を逃さず早期防除に努める。
- カンザワハダニの発生が多くなっている。発生がみられる園では適切な防除を行う（[平成27年5月28日付け病害虫対策資料第6号](#)参照）。
- ナガチャコガネは、5月下旬～6月中旬頃に羽化期～成虫飛来初期となり、防除適期となるため、摘採前使用日数に注意して防除を行う。
- 県内において、チャトゲコナジラミの発生が確認されている。疑わしい葉が見つかった場合には、すぐに関係機関へ連絡する。防除対策は、ホームページ掲載の「[チャトゲコナジラミの防除対策](#)」を参照する。

茶

（巡回調査：5月20～22日）

1. カンザワハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、寄生葉率11.3%（平年4.5%、前年2.6%）であり、平年及び前年より多い。〈+〉

(2)気象予報では多発生の条件となっている。〈+〉（気温やや高：±～+、降水量やや少：±～+）

3) 防除上注意すべき事項

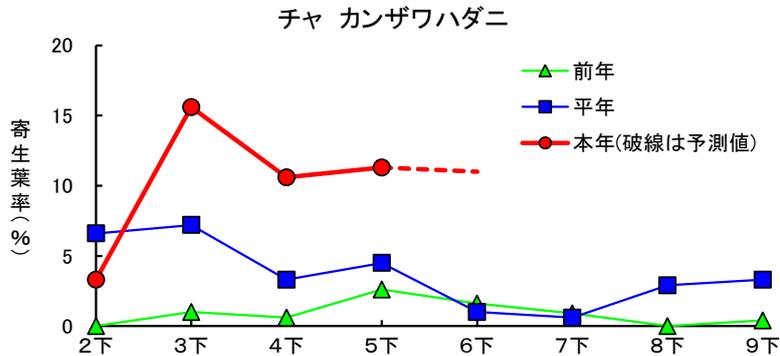
(1)生息部位である葉裏へ薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。

(2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一薬剤は年一回の使用とする。

(3)詳細な防除対策は[平成27年5月28日付け病害虫対策資料第6号](#)を参照する。



巡回調査時の生育状況



2. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

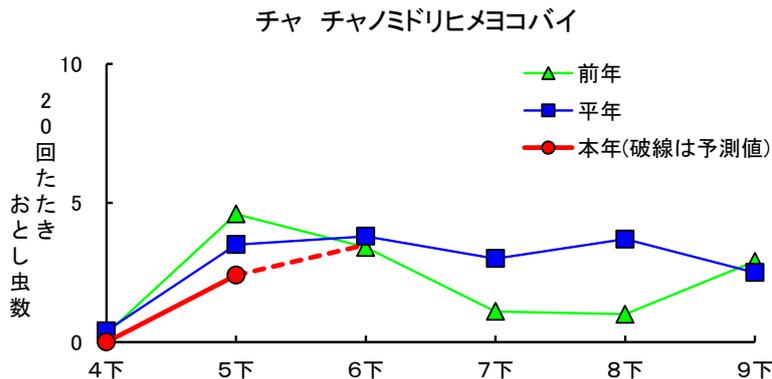
2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、20回たたき落とし虫数は2.4頭（平年3.5頭、前年4.6頭）であり、平年よりやや少なく前年より少ない。〈-~±〉

(2) 気象予報ではやや多発生の条件となっている。〈±~+〉（気温やや高：±~+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏へ薬剤が十分にかかるように丁寧に散布する。



3. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、20回たたき落とし虫数は8.3頭（平年19.7頭、前年7.3頭）で、平年及び前年並である。〈±〉

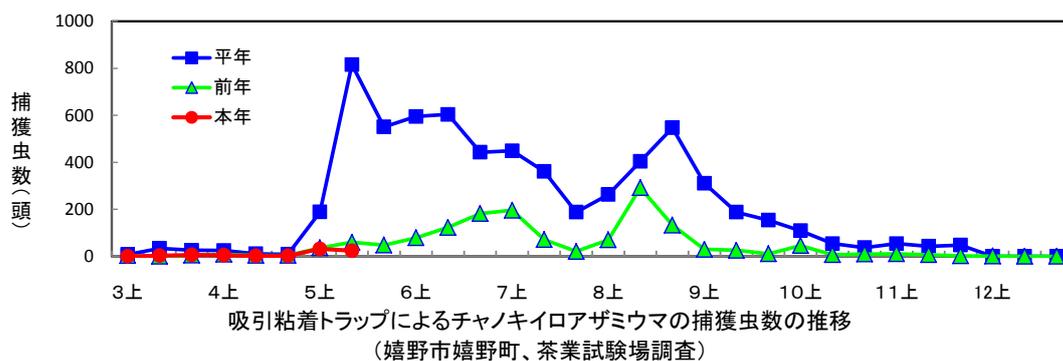
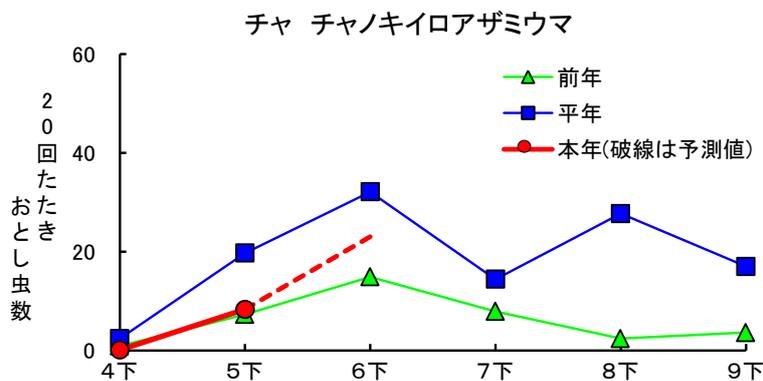
(2) 吸引粘着トラップによる誘殺虫数は、4月下旬が2頭（平年9頭、前年4頭）、5月上旬が32頭（平年189頭、前年36頭）、5月中旬が24頭（平年816頭、前年60頭）と平年より少なく前年並で推移している。〈-〉

(3) 気象予報では多発生の条件となっている。〈+〉（気温やや高：±~+、降水量やや少：±~+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 幼虫は葉裏に生息することが多いので、葉裏にも薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



4. チャノコカクモンハマキ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、発生を認めていない（1m²あたりの被害葉数：平年0.1枚、前年0枚）。

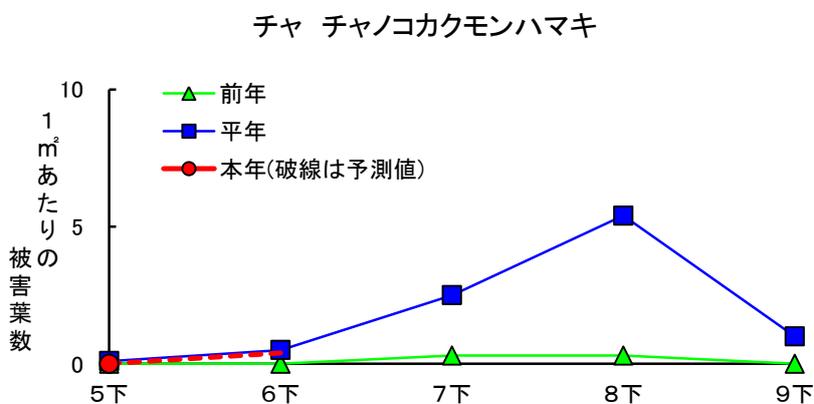
〈-~±〉

(2) 気象予報ではやや多発生の条件となっている。〈±~+〉（気温やや高：±~+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 葉がつづられはじめると防除効果があがらないので、つづられた葉が少しでもみられたら直ちに防除を行う。

(2) 二番茶期の防除は、伸育状態によって摘採日を決めて、摘採前使用日数に注意し薬剤を選択する。



野 菜

【概要】

作物名	病害虫名	発 生 量		病害虫防除の てびき記載ペ ージ	備考
		平年比	前年比		
イチゴ (育苗圃)	うどんこ病	やや少	少	188～191	4月30日付け病害虫対策 資料第3号参照
	苗立枯症	並	やや少	193～198	4月30日付け病害虫対策 資料第3号参照
	ハダニ類	多	やや多	199～200	5月28日付け病害虫対策 資料第7号参照
	アブラムシ類	並	並	204～205	
アスパラ ガス	茎枯病	並	並	298～299	
	斑点病	並	並	299	
	褐斑病	並	並	299～300	
	アザミウマ類	並	並	301～302	
	ハダニ類	やや多	やや少	302	
	アブラムシ類	並	並	303	

【特記事項】

【イチゴ】

1. うどんこ病については、子苗への伝染を防ぐため、親株の防除を徹底する（[平成27年4月30日付け病害虫対策資料第3号参照](#)）。
2. 立枯性病害（炭疽病、疫病、萎黄病）については、ビニル雨よけや水滴の小さい灌水装置を利用して、水はねによる菌の飛散を防ぐ。また、炭疽病については、親株からの定期的な薬剤防除を徹底する（[平成27年4月30日付け病害虫対策資料第3号参照](#)）。

【アスパラガス】

1. アスパラガスでは、茎枯病の発生を防ぐために、強い雨風の際はサイドビニルを下ろす。
2. 今後、ハダニ類が増加する時期であるため、低密度時からの防除を徹底する。

【施設果菜類（ナス、キュウリ、トマト等）共通】

1. 栽培終了後はアザミウマ類等が圃場外へ飛び出さないよう、ハウス密閉処理を行う。

イチゴ（育苗圃）

（巡回調査：5月20日～25日）



巡回調査時の生育状況

1. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年より少ない）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、発生株率は13.7%（平年25.7%、前年24.3%）であり、平年及び前年よりやや少ない。〈-～±〉

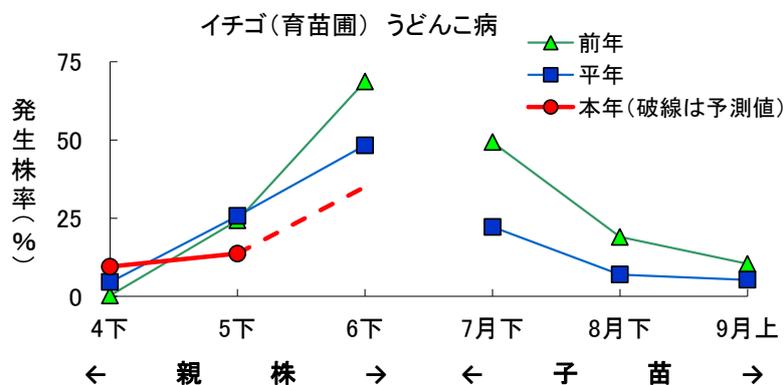
(2) 気象予報では、やや少発生の条件となっている〈-～±〉。（降水量やや少：-～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 葉裏やランナー先端の子苗にも薬液が十分かかるように散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

(3) 詳細な防除対策は[平成27年4月30日付け病害虫対策資料第3号](#)を参照する。



2. 苗立枯症（炭疽病・疫病）

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、発生を認めていない（発生株率：平年0%、前年0%）。〈±〉

(2) 気象予報では、やや少発生の条件となっている〈-～±〉。（降水量やや少：-～±）

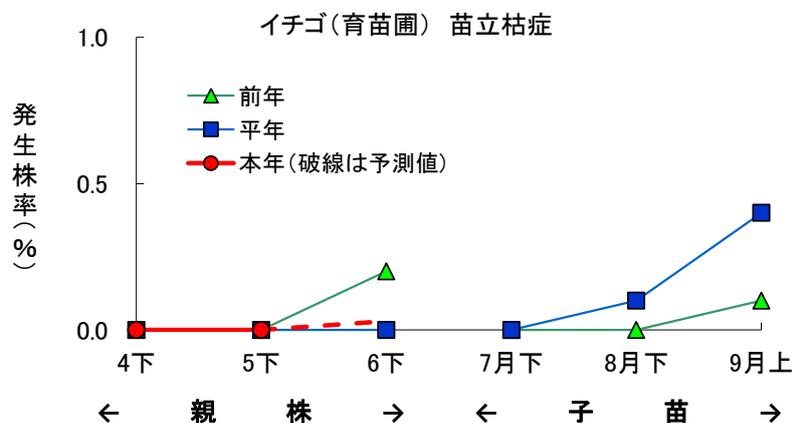
3) 防除上注意すべき事項

(1) 降雨が多い梅雨期は病原菌の飛散、感染に好適な時期であるため、防除を徹底する。

(2) 罹病株はすみやかに圃場外へ持ち出し、適切に処分する。

(3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

(4) 詳細な防除対策は[平成27年4月30日付け病害虫対策資料第3号](#)を参照する。



3. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、寄生株率は5.7%（平年5.5%、前年1.3%）であり、平年及び前年並である。（±）

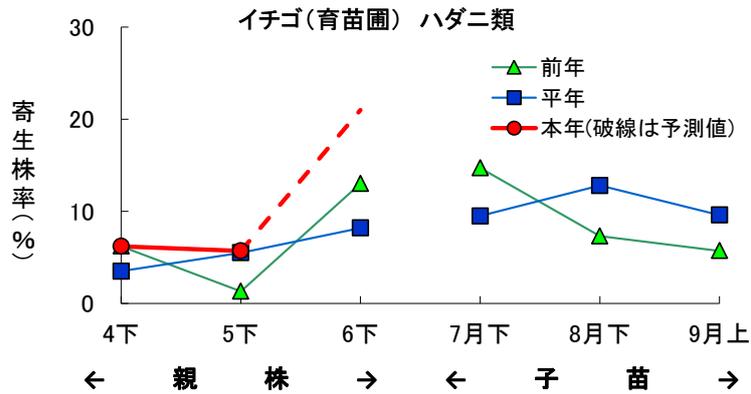
(2) 気象予報では、多発生の条件となっている（+）。（気温やや高：±～+、降水量やや少：±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本種は薬液のかかりにくい葉裏や下位葉に寄生していることが多いので、薬液が十分かかるよう散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

(3) 詳細な防除対策は[平成27年5月28日付け病害虫対策資料第7号](#)を参照する。



アスパラガス

(巡回調査：5月20日～25日)



巡回調査時の生育状況

1. 斑点病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

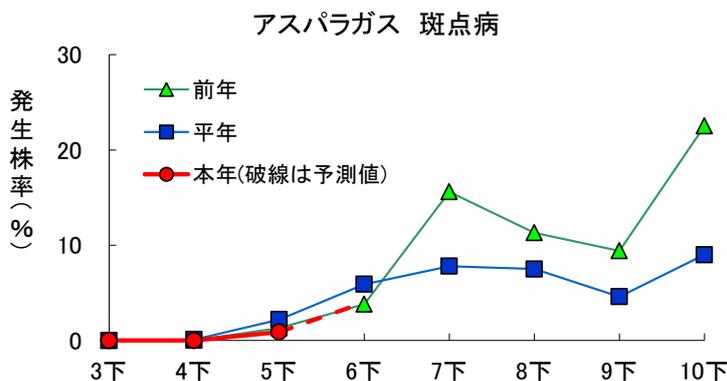
(1) 巡回調査では、発生株率は0.9%（平年2.2%、前年1.3%）であり、平年及び前年並である。（±）

(2) 気象予報では、やや少発生の条件となっている（-～±）。（降水量やや少：-～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 罹病葉は早急に除去・処分し、防除を徹底する。

(2) 過繁茂にならないよう、茎葉を適切に管理し、通風をよくする。



2. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

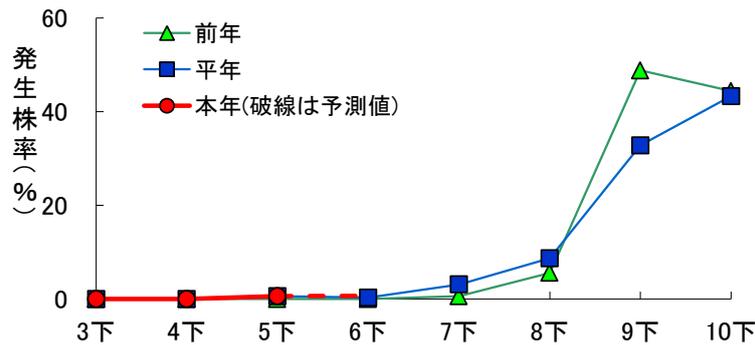
2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生株率は0.6%（平年0.6%、前年0%）であり、平年及び前年並である。〈±〉
- (2) 気象予報では、やや少発生の条件となっている〈-〜±〉。（降水量やや少：-〜±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 罹病葉は早急に除去・処分し、防除を徹底する。
- (2) 過繁茂にならないよう、茎葉を適切に管理し、通風をよくする。

アスパラガス 褐斑病



3. アザミウマ類（ネギアザミウマ）

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

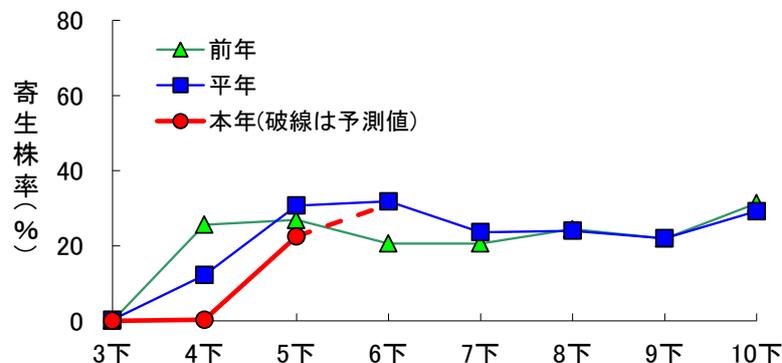
2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生株率は22.5%（平年30.7%、前年26.9%）であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-〜±〉
- (2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている〈±〜+〉。（気温やや高：±〜+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難であるため、低密度時からの防除を徹底する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

アスパラガス アザミウマ類



4. ハダニ類

1) 予報の内容

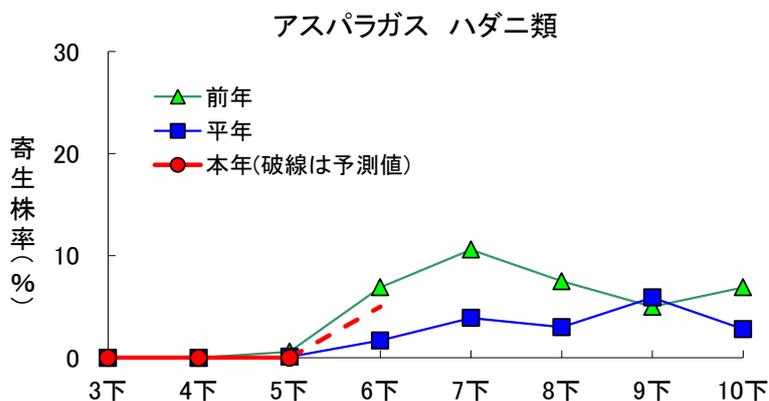
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生は認めていない（寄生株率：平年0.1%、前年0.6%）。〈-～±〉
- (2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている〈±～+〉。（気温やや高：±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難であるため、低密度時からの防除を徹底する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



5. 病害虫等診断依頼状況

平成27年4月21日～5月20日までに農業技術防除センター及び各試験研究機関に持ち込まれ、同期間中に診断が完了した病害虫の診断結果は次のとおりです。

作物名	依頼件数	診断結果(件数)
普通作	コムギ	黒節病(2)
	水稻(種子)	稲こうじ病(1)
	計	3
果樹	カンキツ	薬害(1)
	ブドウ	生理障害等(1)
	レモン	薬害(1)
	計	3
野菜	アスパラガス	斑点病(2)、薬害(1)、生理障害等(4)
	イチゴ	萎黄病(3)、炭疽病(2)、ネグサレセンチュウ類と萎黄病の混発(2)、ネグサレセンチュウ類と炭疽病の混発(1)、ネグサレセンチュウ類(1)、ホコリダニ類による食害(1)、生理障害等(2)
	キュウリ	黄化えそ病(3)、斑点細菌病(1)、つる枯病(1)、褐斑病(1)
	小ネギ	フザリウム属菌による萎凋症(2)
	ジャガイモ	灰色かび病(1)
	タマネギ	べと病(2)、べと病とボトリチス葉枯症の混発(1)、りん片腐敗病(1)、黒点葉枯病(1)
	トウガン	炭疽病(1)
	トマト	茎えそ病(仮称)(1)、褐色根腐病(1)
	ナス	青枯病(1)、ダニ類による食害(1)
	ニンニク	春腐病(1)
	パセリ	ピシウム属菌による苗立枯れ(1)
	計	40
花き	キク	薬害(2)
	ケイトウ	立枯病(1)、生理障害等(1)
	サカキ	生理障害等(1)
	スプレーギク	生理障害等(1)
	スモークツリー	灰色かび病(1)
	トルコギキョウ	細菌による萎凋症状(1)
	ヒマワリ	生理障害等(1)
	ホオズキ	モザイク病(3)、生理障害等(2)
	計	14

合計: 24 作物
60 件

内訳

糸状菌による病害	: 25件
細菌による病害	: 7件
ウイルス・ウイロイドによる病害	: 7件
害虫類	: 2件
線虫類	: 4件
薬害	: 5件
生理障害等	: 13件
合計	63件(糸状菌と線虫類の混発含む)

6. 全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫

主に4月24日～5月25日までに発表されたもの

警報・注意報（重要な病害虫の多発生が予想され、早めに防除する必要があるときに発表）				
発信元	内容	日付	作物	病害虫名
三重県	注意報	2015/04/23	小麦	赤かび病
福島県	注意報	2015/04/24	モモ	せん孔細菌病
愛媛県	注意報	2015/04/24	果樹類	カメムシ類
静岡県	注意報	2015/04/30	麦類	コムギ赤かび病
静岡県	注意報	2015/04/30	バレイショ	ジャガイモ疫病
沖縄県	注意報	2015/04/30	さとうきび	メイチュウ類
長野県	注意報	2015/05/01	果樹、野菜等	マイマイガ
福島県	注意報	2015/05/08	ナシ	黒星病
徳島県	注意報	2015/05/13	果樹全般	果樹カメムシ類

注：太字は九州地方で発表されたものを示す

特殊報（新たな病害虫が発生した時などに発表される）			
発信元	日付	作物	内容
静岡県	2015/05/11	オリーブ	オリーブがんしゅ病
佐賀県	2015/05/18	トマト、ピーマン	トマト茎えそ病（仮称）、ピーマンえそ輪点病（CSNV）

注：太字は九州地方で発表されたものを示す

技術情報等（九州地方で発表されたもののみ）			
発信元	日付	作物	内容
大分県	2015/04/23	ナス科植物、花き類	CSNV 防除対策について
佐賀県	2015/04/28	早植え、普通期水稻	いもち病の防除の徹底について
佐賀県	2015/04/30	イチゴ	育苗圃におけるうどんこ病、炭疽病の防除対策
佐賀県	2015/04/30	ナシ	黒星病の防除対策の徹底について
長崎県	2015/05/01	茶	クワシロカイガラムシの防除対策について
鹿児島県	2015/05/12	茶	炭疽病の防除対策について
長崎県	2015/05/15	ビワ	ナシマルカイガラムシの防除対策について
鹿児島県	2015/05/21	サトウキビ	カンシャコバナナガカメムシの防除適期
佐賀県	2015/05/22	果樹全般	果樹カメムシ類の発生状況と防除の徹底について

注：太字は佐賀県で発表されたものを示す

7. 農薬の適正使用を徹底しましょう！

◎水稲育苗箱に農薬を施用する場合は、**農薬が育苗箱からこぼれ落ちないように、畦畔等で行うか、育苗箱の下に不浸透性のビニルを敷く等の対策**をとりましょう。

◎農薬の登録内容は変更されることがあります。

使い慣れた農薬でも、ラベル等で登録内容を確認しましょう。

消費者の信頼を裏切らないためにも 農薬を使用するときには細心の注意を！

農作物には「食の安全」が守られるよう、使用できる農薬が定められています。しかし、農産物直売所等に出荷された農産物の中に使用できない農薬が検出されるなどの不適切な事例が見られています。

消費者の信頼を裏切らないためにも、以下の注意事項を守りましょう

①農薬散布前に、まず、防除器具の洗浄！

以前、使用した農薬が、タンクやホース内に残り、後に別の農薬を使用した際に適用のない作物にかかり、残留農薬基準値を超過する事例が見られています。



次に使う時に、前に使った農薬がでてこんごとせんばね！



(佐賀県植物防疫協会パンフレットより)